

ワールド・カフェ 「人むすびの場」を主宰して

～みんな主役の“対話と創発の場”の可能性～

株式会社テラ・コーポレーション代表取締役

高重 和枝

たかしげ かずえ



1

「人むすびの場」でむすぶ

「人むすびの場」という名前は、「むすび（産霊）」という、ものを生み出す力を表す古語からイメージした。「おむすび」の語源もここにある。おむすびは、米粒を空気が入るようにふわっと握ると口の中でほぐれておいしく感じる。そこから発想し、心を開放して語り合える、居心地のよい、何かが生まれるエネルギーに満ちた「場」をめざしている。

今の世の中、いろいろな課題はあるが、地域・社会をよくしたい「思い」を持って活躍している人財も多くいる。そのような人財と直にふれあい、刺激を受け、問題意識を共有する多様な人たちが、お互いの「思いと知恵」を

ワールド・カフェという会議手法がここ数年でポピュラーになってきた。筆者も定期的にその場を提供するワールド・カフェ「人むすびの場」を主宰しているが、2008年7月から始めて、今年の6月で71回になった、そこから見えてきたことは、「世の中に、人財はいる。面白いアイデアもある。人財と多様なアイデアをつなぐやわらかな『場』をつくり、有機的に結び合わせることで大事である。そこから『熱い思い』『知恵出しの会話』『多様なネットワーク』が生まれ、共感の輪が、地域社会でも、企業・行政、NPO等でも求められる『課題を発見し、解決する』力となって広がっていく」ということである。

分かち合い、課題解決をしてさらに前進できたらよいと考えていた。そして、一人ひとりがチェンジメーカーになるような「対話の創発の場」をつくれたら、と思い立ち、仲間と共に立ち上げた「人むすびの場」。コンセプトは「場を一緒につくる」である。

2時間という短い枠で、毎月テーマを決めてゲストスピーカーを招き、話を受けて「ワールド・カフェ」の手法で対話し、交流するもの。毎回の記録はウェブに公開している。
(<http://www.terrestrial.co.jp/musubi>)

ゲストスピーカーは多彩であり、その活動フィールドは、宮城、福島、埼玉、東京、茨城、千葉、神奈川、静岡、山梨、愛知、京都、ニューヨーク、はたまた世界にも及ぶ。まだ認知度は高くなくとも、若者の活躍のモデ

ルになるような若い人も積極的にお招きしている。

参加者の職業も様々。NPO関係者、行政、金融機関、大学生、企業人、ジャーナリスト、経営コンサルタント、行政書士、大学教授、教師、ファイナンシャルプランナーなど多岐にわたる。

毎回、「気づき」や「印象に残ったこと（キーワード）」などの感想を問う振り返りアンケートを行い、取りまとめをして、翌日、参加者全員にお返ししている。参加者からは「分野を超えたつながりが大切」「異質は面白い!」「新たな気づきを持ち帰ることができ、業務やプライベートの活動の参考になっている」などの声をいただいている。ほとんどのゲストスピーカーが、「私が一番勉強になった」という感想を述べてくれることも嬉しいことである。

※1 米国のアニー・ブラウンとデイビッド・アイザックスによって、1995年に開発・提唱された。「知識や知恵は、機能的な会議室の中で生まれるのではなく、人々がオープンに会話を行い、自由にネットワークを築くことのできる『カフェ』のような空間でこそ創発される」という考えに基づいた話し合いの手法。自分の意見を否定されず、尊重される安全な場で、結論を導いたり方向づけたりしない、自由な会話を行う。

2 ワールド・カフェの効用

ワールド・カフェは、次のように進めていく。
① 4〜5名単位のグループに分かれ、20分ほどの会話をする。② 次にグループのうちの一人だけが残し、ほかの人は別のグループの席に移動する。③ 一人残った人は新しくテーブルにきた人に、これまでの会話の概要を説明する。そして、新たなメンバーとそこから好きなように新たな会話をスタートさせる——このように、一つのテーマから連想され



「人むすびの場」参加者の年代は、大学生から70歳代までと幅広く、性別でいうと圧倒的に男性が多い

るアイデアを集団で話し合っていく。

通常20分ほどの会話を、メンバーを代えて計3回行う。多い人は3テーブル移動することになる。みつばちが花から花へと飛び回り、アイデアを他の花へと受粉するイメージである。時間があれば、最初のグループに戻り、気づきや発見を統合するセッションを設けたり、全体セッションで集合的発見を収獲し、共有することもできる。

今、企業のみならず、行政、NPOなどで求められる「課題を発見し、解決する」の^{*}に、こうした「ワークショップスタイルの課題解決へのシステムズ・アプローチ」が注目されている。ワールド・カフェはその一つの手法である。

① 話しやすい、② 発言の機会が多くなる、③ 参加者全員の意見が集まる、④ 人がつながり、自由なネットワークが生まれる——これがこの手法のよいところだ。課題を発見し、解決方法のアイデアを多く出し合う段階において非常に有効である。（7月4日開催の「信金発！ 地域発見フェア 全国信金役職員交流会」でもワールド・カフェが実施された。■編集部注）「人むすびの場」では、1回のワールド・カフェを70分ほどかけて行っている。結論はあ

えて出さない。しかし、多様な人たちが一つのテーマで対話する時、思いもよらない気づきが生まれるものだ。何か気がかりな問題を抱えて参加した人が、多様な考えに触れ、ヒントをもらったり、視野が広がったりすることがある。自分をオープンにして他者と対話し、他者を受け入れ、自分のことに改めて気づく時、そこに「創造」が起きてくる。周りへの眼差しや行動が変わってくる。まさに、「自分が変われば、世界が変わる」のだ。

※2 本誌2013年4月号58ページ「ワークシヨップを駆使した課題解決へのシステムズ・アプローチ」慶應義塾大学大学院特別招聘教授 保井俊之氏を参照。

3

印象に残るゲストの回と学び

これまでに、「まちづくり」「都市と農」「社会起業」「食」「シティセールス」「子どもの学びの支援」「若者支援」「子育て支援」「林業」「ジヤナリズム」「限界集落」「デザイン」「被災地報告」など、様々な人と人・人とモノ・人とコトをむすび、つなげるテーマで開催してきた。

その中で、印象に残るゲストの回を三つほど振り返ってみよう。

①〈テーマ〉マイクロモノづくり 町工場を元気にする

「マイクロモノづくり」って何？
製造業が6次産業化するネットワークを仕掛ける「ゲスト」宇都宮茂氏（株式会社enmonno技術担当取締役）

日本のものづくりの新しい息吹を感じた回であった。

マイクロモノづくりは、誰もが絶対に欲しいと思うマスニーズ（生活必需品）に合わせたマス生産、マス消費とは対極にある考え方である。どこかの誰かが絶対に欲しいと思うマイクロニーズ（千差万別）に合わせて、企画・デザイン・設計・生産・販売し、高付加価値・高利潤のモノづくりを行う。宇都宮さんたちは、クラウドファンディングにより、企画段階から開発を支援している。

「自社製品開発のヒントは『外』ではなく自分の『内側』にある。売れそうな自社製品開発ではなく、持続・継続できる自社製品開発を！」というメッセージをいただいた。

参加者の感想は、「収益よりも『ワクワク』が大事」「コーチング的サポートの重要性」引き出してくれる人（気づかせてくれる人）の役割は大きい」「日本は今、転換点にいるんだ。

だ。中小企業が活躍し中心になれる。新しいビジネスモデルが必要だと認識」など。

②〈テーマ〉若ママの当事者パワー 若いママたちの当事者パワーが世の中を変える

「未来を育むママたちを真ん中に社会課題解決に取り組む」
〈ゲスト〉掃部まゆ氏（一般社団法人「Stand for mothers」理事長）

現在、女性の社会参加や活躍が期待されているが、ママたちに対して当事者意識を喚起する、伝わるメッセージの発信の仕方を学んだ。掃部さんによれば「若ママとは25歳以下で第一子を産んだ、ママ人口の約10%の女性。毎年80万人の新しいママが生まれる。その当事者パワーを引き出すには、メッセージを『ママ語に翻訳』して伝わるようにすることが大事だ。知らなかった世界を知った時、他人事から『自分ごと』になって初めて『自発』が生まれる。自分だったらどうするか、の視点が見つかり、『今、自分ができること』を考え、行動してみることにつながる」という。

例えば「乳ガン検診を受けましょう」より「かわいいわが子を泣かせないために」というキヤッチコピーのほうが心に響く。心に響けば行動

に移すケースが多い。

掃部さんの「ママはすべての社会課題の根幹。ママが真ん中」の社会改革を進めよう」というメッセージには心打たれた。参加者から「ママ語翻訳」がキーワード↓ストーリーをつくる、語ることが大事」「防災が大切」では伝わらない。『あなたの子どもの笑顔が見られなくなる』のほうが伝わると知った」「言葉でアクションを起こす」など、若ママの行動原理を他のことに応用しようとする感想があった。

③〈テーマ〉障がい者スポーツの未来
障がい者スポーツを知れば、未来が見える
くなぜパラリンピックを伝え広めるのか
〈ゲスト〉佐々木延江氏（NPO「国際障害者スポーツ写真連絡協議会（パラフォト）代表）

「誰もが人生の当事者と考えている。長野パラリンピックの時から取材を続け、ファンの立場として、パラフォートのメンバーは自費で競技会に参加している。選手の素晴らしい活動を知り、伝えることが社会に役立ち、取材を続けることは楽しい」という言葉に、佐々木さんの静かな情熱が伝わってきた。

見せてもらったパラフォートの映像の中には、障がいがあるかどうかはまるで関係ない、選手たちの美しく、強く、輝く姿があった。「障がいとは何か」「スポーツとは何か」という深い問いを投げかけられた。

参加者の感想は「かつこいい！ スポーツする、必死になっている姿が美しい。命の輝き」「皆「スポーツ」「笑顔」「元氣」を求めている」「We are fansになれるといい。障がい者と健常者の枠をすり取り払って一体化できる未来がある」「支援はカメラマンにも必要」など。ぜひ、信用金庫の店舗等で展示会を開催していただきたいと願う。

4 ワールド・カフェからの展開・発展 〜五感で感じるスタディ・ツアー

定例のワールド・カフェは、都内のオフィスビルの中で開かれるが、それをきっかけにして、参加者間でフィールドを飛び出す場合もある。野外に出かけ、現地を視察し、現地の人と語らうのは楽しく、有意義であった。

①人むすびグリーン・ツーリズム 五感で小菅村

第23回の茅原裕昭さん（財都市農山漁村交流活性化機構グリーン・ツーリズムセンター長）の回の後、参加者有志で企画したもの。都市生活の喧騒から離れて、東京の水源・多摩川の源流 山梨県小菅村での源流体験、森林セラピーや小菅の味づくり体験、村内視察、村人とのワールド・カフェなど、五感をフルに使って村の魅力を堪能した。



多摩川の源流である小菅川での源流体験。水源は東京都が管理しているが夏期だけ、子どもたちの環境教育のために開放される



山からはタケノコを掘り出し、畑からは野菜を収穫。新鮮な食材をそろえてBBQが行われた



子どもたちがしっかりとお手伝いをしたおかげで(?)梅雨空に晴れ間がのぞき、太陽の下でBBQを楽しむことができた

②初夏のバーベキュー・パーティー@所沢コ
ロットの「食を通じたやさしいつながり」
& 「いのちの恵みを味わう日」

東京から1時間の埼玉県・所沢にある農家
民宿コロットで、畑の農作物を収穫し、初夏



農体験によって、にんじんに緑の葉っぱがあることを初めて知った子どももいる

のバーベキューを行った。畑で野菜を、山で
タケノコを採って、いのちのエネルギーをそ
のままいただく贅沢や、みんなで力を合わせ
て食事をつくる喜びを味わった。

子どもは土に触れ、丸ごとの野菜を体験し、
五右衛門風呂を沸かしたり、山羊と遊んだり、
いろいろな経験を楽しんだ。身の回りにある
豊かさを感じ、感謝する一日となった。

このパーティーのきっかけになった第37回
ゲストのコロット代表の峯岸祐高さんとは、
継続した付き合いをしている。

5

「人むすびの場」の縁から生まれた
コラボレーション

実際の事業につながる、新しいコラボレー
ションも生まれている。その一部を紹介する。
東京の自治体職員が、もともと、あるNP
Oの代表と知り合いであったのだが、部下職
員がゲストの「若者の支援のしかた」の回に
出たことで弾みがつき、そのNPOとで生涯
学習センターモデル事業「若者支援事業（お
とな大学）」協働事業が立ち上がっていったこ
とがある。

中小企業診断士の木村裕美さん（第25回
ゲスト）によれば、第18回「離島と東京を
結ぶ」の回で、島根県海士町観光協会職員
で「離島キッチン」という移動販売車を運
営している佐藤喬さんと知り合い、つなが
りができた。

埼玉には海がないので、急速冷凍技術を活
用した「寒シママ（スルメイカ）の肝醬油漬
け丼」の試食販売をしてもらったところ、西
川口においしい「離島」がやってきた、と評
判になり、その後、海士町大島高等学校の生
徒が販売のインターンシップにきた。島根県
の離島・海士町と言えば、先進的な地域づく
りで知られる有名な島で、300人以上のI
ターン者が行ったところだ。今も海士町と川
口市の関係は続いている。

6 信用金庫が「対話と創発の場」の仕掛け人に

ワールド・カフェは、地域活性化のための知恵出しの手法としても、あらゆる組織における課題発見・解決に役立つ。

最近では、IT化が進み、職場の中で意見交換をする機会も減った。「カフェ的会話」を職場での会議やミーティング、日常の会話の中に意図的にデザインし、会話のあり方を変えていってはどうだろう。信用金庫内の会議においてはもちろん、取引先企業へのアドバイス、地域サークル等の場面、新商品・サービス開発のステージでも、この手法を活用していくことができる。

取引先中小企業、地域住民との距離が近い信用金庫だからこそ、他の金融機関にはない、地域の未来と一緒に試みる試みも広がるとよいと思う。市民、NPO、企業、行政、大学生など、様々なステークホルダーが一同に介し、まちの魅力や未来を語り合う場の仕掛け人となっていたきたい。ワールド・カフェは、多様な人を集めることと、ファシリテーターによる「問い」が大事になる。地域性もあることから、信用金庫内に場を進行できるファシ

リテーター人財を養成することは、組織にもまちにも、活力を生み出すきっかけになるはずだ。「人むすびの場」では、日本中の様々な地域の方とふれあいたいと願っている。毎月、開催しており、予定はHPで告知している。よろしければ、東京近郊の信用金庫の方に限らず地方の方も出張の際などにお寄りいただき、自らが「場づくり人」となっていたきたい。

参加することで、多様で異質な見方、アイデアに触れ、頭の中に風が吹き、自分のアイデアも磨かれていくことを請け合う。そして、ワールド・カフェを通じた交流の楽しさやアイデア創出の手法を持ち帰っていただき、組織や地域の活性化のために使っていただけなら、この上なく嬉しい。

7 「人むすびの場」のいのり

まずは、100回の開催をめざしている。ゲストの活動内容とともに、その方のあり方リーダーシップに触発され、気軽な場の中で心が解きほぐされる。ありのままの参加者自身のリーダーシップが引き出され、磨かれる場となればよいと思う。

そして、「人むすびの場」のような「気づき」と学びの場が広がり、実際の社会・組織の課題解決が進み、居心地のよい世の中になることを願っている。

さらに、いつか、大きな会場で「活動見本市」ができたらと思う。社会課題に取り組んでいるこれまでのゲストやその活動に関心を持つ人たちが横につながった「対話と創発の場」ができた時、どんなコラボレーションが生まれるのか、イノベーションが起きるのか、楽しみである。

〈参考文献〉

- ・アニータ・ブラウン／デイビッド・アイザックス著 香取一昭・川口大輔訳『ワールド・カフェ カフェ的会話が未来を創る』2007（ヒューマンバリュー）
- ・香取一昭・大川恒著『ワールド・カフェをやる』2009（日本経済新聞出版社）

プロフィール

たかしげ・かずえ
1996年、(株)テラ・コーポレーションを設立。個人向けの創造性開発プログラム、キャリアデザイン支援のほか、企業・行政職員・市民対象に人財育成コンサルティングとワークショップ（研修）を行う。販路開拓のビジネスマッチング会にも携わる。経済産業大臣登録中小企業診断士。（一社）埼玉県中小企業診断協会 理事。埼玉県女性活躍推進アドバイザー。著書に『トップが綴る勇気が出るいい話』（共著、PHP研究所）等